

ネクスト ヒロイン 未来へ駆ける



28日号砲

「第37回大阪国際女子マラソン」(28日午後0時10分スタート)は、次世代を担う若手ランナーの育成枠「ネクストヒロイン」が設けられて4年目を迎える。今大会はトラックでも結果を残してきた大学生6人(他に実業団1人)が選出された。将来性が見込まれる大学生ランナーの横顔を紹介する。

(丸山和郎)

「第37回大阪国際女子マラソン」(28日午後0時10分スタート)は、次世代を担う若手ランナーの育成枠「ネクストヒロイン」が設けられて4年目を迎える。今大会はトラックでも結果を残してきた大学生6人(他に実業団1人)が選出された。将来性が見込まれる大学生ランナーの横顔を紹介する。

過去5年の大阪国際での大学生トップの成績

2013	林田詩織里(大阪芸術大)	8位	2時間39分36秒
2014	前田 彩里(佛教大)	3位	2時間26分46秒
2015	奥野有紀子(京都産業大)	7位	2時間32分41秒
2016	床島 沙紀(関西外大)	14位	2時間37分8秒
2017	新井沙紀枝(大阪学院大)	19位	2時間34分40秒

主催 日本陸上競技連盟、産経新聞社
 サングレインスポーツ、関西テレビ放送
 大阪府・競技協会
 協賛 日ハル工業、シチズン時計、ダイハツ、大塚製薬
 協力 フライオン、大塚製薬

(撮影) 宮沢平士郎 鈴木健児

五輪の夢刻む一歩



かの 棚池穂乃香 京都産業大3年

昨年の関西学生対校選手権(関西インカシ)で5000、1万の2冠に輝き、自信をつけた。初マラソンに向

け、冬場も週に1回のペースで距離走を重ね、「少しずつ持久力がついてきたと感じている。最初は42・195キロに漠然とした不安があったが、今は挑戦への意欲が湧いている。

小学3年生のときに父、治彦さんの影響で陸上を始めた。父は三重・伊賀白鳳高で全国高校駅伝の出場経験を持つ。父と一緒に都大路に駅伝の広後に行つたのがマラソンランナーを目指すきっかけになった。練習量、とくに距離走

が多いことが知られる京都産業大に入學。1年生のときに右アキレス腱を故障し、駅伝メンバーから外れる悔しさを味わった。2年生でも思うように記録が伸びず、陸上をやめたいと思つた。とは何度もあったが、「ここでやめたら自分に負けることになる」と発奮。3年生になって大きく才能を開花させた。

普段からレースで腕時計はつけてない。初マラソンも明確な目標タイムは掲げず、「何も考えずに挑戦する気持ちでいきた」と話す。ただ、大学卒業後にははっきりとしたプランがある。「実業団に入つて、マラソンで五輪に出たい。ターゲットは東京五輪の先にある2024年パリ五輪。20歳で挑むマラソンは、ステップアップのための大きな一歩だ。

切るぞ2時間40分



おわたるみずは 大樽瑞葉 神戸学院大3年

有言実行型のランナーだ。昨年11月の神戸マラソンでは日本人トップの4位(2時間40分41秒)でゴール。前半に飛ばしすぎないことを意識

識して後半にペースを上げ、事前宣言していた通り自己ベストを更新した。神戸で自己ベストを目標に掲げたのは理由がある。駅出場を目指して5000キロのタイムを伸ばすための練習を積んでいくが、マラソン練習を重ねていくの選択に悩んだ結果、自身が好きなマラソンを選択。だからこそ、「順位よりもタイムにこだわっていた。」「でもスピードが苦手で、昨年2月に大阪学院大の選手と合同練習をした際もオーバワークで座席を脅折。夏場まで走れなかつたが、走らなければいけない。補給の必要性が分かった。新たな教訓を得た。夏以降は練習の質も格段に上がってきた自信がある。3年連続の出場となる大阪国際に向け、「2回は2時間40分を切る」と力強く言い切った。

私の挑戦ここから始まる。

笑顔でゴール今回も

りり 白石莉理 大阪芸術大4年



大阪芸術大に進学したのは「家具やインテリアに興味があったから」。最初はデザインの勉強でもつもりだったが、女子駅伝部の中瀬洋一監督から「芸大では勉強と並行して陸上ができる」と勧められ、本格的に長距離に取り組み出した。中瀬監督は実業団で浜井陽子(三井住友海上)らの指導経験を持つ。マラソンへの適性を見いだされ、昨年2月の東京で初めて42・195キロを走った。結果は2時間43分19秒で、権エリートの部で1位。「何より笑顔でゴールできたことがうれしかった」と振り返る。目標は、2013年大会8位に入った大学の先輩、林田詩織里がマークした芸大記録(2時間39分36秒)を上回ること。「今回も笑って、42キロ走り終えたい」と目を輝かせる。

Qちゃんの教え胸に

水口瞳 大阪学院大3年



「人並みの練習では勝れない」。大田、静岡・阪学院大の大先輩であり、2000年シドニー五輪女子マラソン金メダルの高橋尚子さんから聞いた話が、陸上生活の支えだ。その言葉通り、自身も努力を重ねてきた。だが、「長距離が好きだったので、1人で走っていた。大学入学時も半分、地道に練習を重ね、5000キロで15分台、1万キロで39分台をマークするまでにタイムを上げ、チームを引っ張る存在へと成長した。」「トラックでのスピードは折り紙付きだが、10キロと距離は長い方が好きなのだ」と話し、3年生で初マラソンに挑む。昨秋以降、駅伝練習の合間にも1人でジョギングの練習を増やし、足付きを意識してきた。

今回は同じ3年生である棚池(京産大)と一緒に初舞台を踏むことも大きな刺激になっている。「今は楽しみな気持ちでいっぱい。積極的に食らいついていきたい。孟明のエースとして精いっぱい走りを見せる。」

異色 芸人ランナー

林和佳奈(大阪学院大4年)



2年連続でネクストヒロインとして浪速路を走る。1年時から駅伝で活躍するから早くからロードでの練習をみせてきた。昨年の大阪国際でネクストヒロイン枠に選ばれ、初マラソン。その後も淀川寛平マラソンなど積極的にロードレースに出場している。大手芸能プロダクションのタレント養成所のオーディションにも合格した芸人志望の異色のランナーだ。

名門の主将 集大成

田中真愛(日体大4年)



全日本大学女子駅伝の常連校でもある日体大で1年時から駅伝メンバーに選ばれ、最終学年はキャプテンを任せられた。学生生活の集大成として大阪国際で初マラソンに挑む。1万キロの自己ベストは35分台で、決してスピードランナーではないが、走りのモットーは「誰からも離れないようにすること。マラソンでも粘りの走り、悔いのないレースを目指す。」